

うつろい^{かく}額^え絵

比^ひ類^{れい} 犬 ヌネ



まよいこんだ 美術館

まよいこんだので、道は覚えていません。

かかっていたのは、背よりもおおきな 何かの絵

おや、この絵 すこしうごいた？

絵は少しずつ、姿を変えていくようです...



きぐるみをきた みにっこは 思いました。

(これは、宇宙船の窓だよ)

すりきれた科学雑誌をぎゅっと抱えています。

(そんで、このむこうの星雲に きのう考えた宇宙怪獣がいるんだぞ)

この子にとってアントライオンは寓話でなく、銀河の怪しく素敵なけものやうです。

額縁のなかに、ゆめの星雲に続く星の海が現れました。

みにっこは、とう！と元気に 絵に飛び込んでいきました。

そして絵のかかる一角は、また しいんと静まり返りました。



文学少女さんが、マフラーの雪を払いながらやってきました。

長い三つ編みと、赤い毛糸でおばあちゃんが作ってくれたマフラーと、詩のわかる友人にすすめられた悲しげな黒表紙の本を持って、黒いせーらーを着ています。

(ここにも、六花が舞っている
でも、ずっと穏やかだわ)

ぱっきりとした縁のめがねの向こうの眼は、鋭さと陰をふくんだ鈍色の金属のやうです。

(わたし、祈るやうに こうして見上げているだけの なにかのかげみたい
でも光にてらされても 気後れする影が垂れるさまで長く伸びるだけ

もう、ふぶくのはたくさんだよ)

手を振ってそれじゃあ、と橋をわたっていき、そのままいなくなった傷だらけの文学少年

本はかれの持ち物です。

絵にココが蝶のやうにとまり 語りかけるうちに、静止した雪原の風景が動き出しました。
動物の足音もきこえてきます。

動物は人のやうにかけてきて、手を差し伸べてきました。背はひざくらいです。

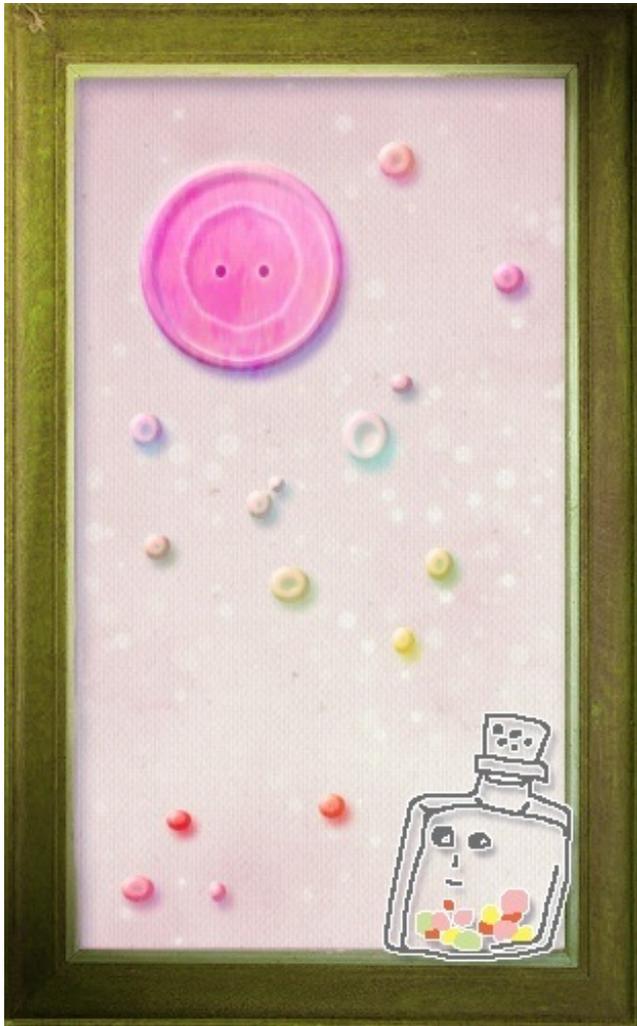
すふぁ〜とした柔らかいけなみは厳冬を来たのに暖かく、細長い鼻づらは正面から見ると噴出してしまいそうなかわいらしさ

(マフラーと同じ色の、私と似た目をしてる この仔)

頭をなでたら、かすかに鼻をならしてまっすぐな眼をほそめ、長い尾を丸めました。

文学少女さんは左手でしかと本をいだき、かがんで細身の動物と手をつないで 絵の雪原にはいってゆきました。

そして絵のかかる一角は またしいんと静まり返りました。



かこん、しゃらん かこん、しゃらん と、どっしりしたガラス瓶が歩いてきました。
中には、色とりどりの小さなおもいでの造形がどっさりっ
跳ね回る釦たちが わいわいしていました。

青いしましま・オパール光沢の貝製、丸い真っ赤、つの型、あーるのついた四角い木製
さいころがたも、ほうせき型も、花や葉 鳥や鹿の形まで

ほんの小さいひとつひとつが、丁寧に形づくられ、飾られて生き生きと絵の世界にいきているや
うです。

一方額縁の中は桃色の布地の地平が一面に続いているのみです。

染なのか 白との 牛さんのやうなまだら模様
ずっとみていると、何かを足したくなってきました。

透くからだを傾けてまっさらな絵にこころを飛ばしていた瓶さん、意を決してこるくを緩めま

した。

きりもみ状にこるくは上がっていき、ぽん！と開放の音

瓶詰めのだらちは、それぞれの方法で絵の中の、布地の地平へ飛び込んでいきました。
まるで幾多の空中に咲く花が新天地に舞っているやう

いっそう華やかになった絵をしかとながめて、瓶さん挨拶代わりに2度 たつぷを踏みました。
わいわいくるくる 跳ね回る花たちのなかで、
溶け始めた牛乳飴のやうなひとつ だけが、とぼとぼとおもいでの窓辺へ帰る瓶の後をこころ
で追っていました。

そして、絵のかかっている一角は また静かになりました。



白い一角にかかる、おおきな絵

きょうは、波紋がついん ついんとわをかいて揺れています。

そのまえに、まんまるい目の 銀のしゃつのひと ひとり
何もいわず おどろいて見えています。

額の中では、銀の服さんがうまれたところが あらわれました。
まぶしくて手をかざすほどのおひさまがさしこむ、流れる泡のそこ

(そう ここだ ここで、ふるふるする宝石みたいな家からでた
橙色の、ぱんぱんのカバンだけもって)

ぽこぽこ ごぼごぼ ぴちゃ さあーっ どおーっ
ごつい石の底が小さくなり、深くなり、広くなり
銀の服さんはやっと、とてつもなく広大な、未知の香り広がるおおうみへ

みんなみにっこでしたが、ふしぎとみえない道は継がれています。
それとここまでで覚えた 身を守るために必要なちえをたずさえ、
かれらだけの進み方で すっと水をかいていきました。

まんまるい目の 旅のこたち
出発したときより、相当数が減っていました。

(なんだ～ ここにあったのかっ
長く迷ったもの、おかしいと思ったんだよ わたしもナ)

みたことなんてない銀のぶらうすのおかあさんと、銀のせびろのおとうさんがいます。
銀のずぼん・すかーとのきょうだいも、なんと13000にんっ

これでも、少ないくらいです。

きょうだいたちは、13000にん分にとっておいたお菓子の一粒ずつの団子を差し出しました。

額の中では、なくなった川のなかで なくなったおさかな達がまんまるくなって きらんきらん
揺れる光の下にいます。銀のしゃつさんの記憶の山の奥になごりある せぜらきの中

やがて柔らかな泡をくちから吐きつつかれらは薄くなっていき、絵はまたもとにもどりました。

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



顕微鏡を抱えた、やせた魔法使いさんが 肩のこりをほぐしつつやってきました。

絵を見ているやうで、見ていないやうで
重力がやけにからだにかかって、ここから動けません。

なにかぴちぴちと、ちいさな音がします。
もうろうとしつつ見上げると、額縁の中の鼓動するオレンジの中に、なにかがひしめいていま
した。

それは、たまごのなかのやう

透き通って ぷるっとまんまる型の あるいはまがたま型の ほそなんがい 未知のいのちのひ
とつぶずつが、かれらそれぞれのルールで呼吸したり 回転したり 直進したり ふるえたりし
ていました。

はじめて顕微鏡をのぞかせてもらったときにて、炭酸飲料の粒が次々はじける心地

慎重な靴音をさせつつ 絵に歩み寄ると

半透明の生き物の一匹が寄ってきて、魔法使いさんの右手の上で一回転しました。

八本のずんぐりしたあしで、よちよち空気をかく 草創期をおもわせる生物

川の水をすくってきて水槽に入れ、そのなかで動くものたちを見つめていたことを思い出します

。

(このなかに、熱にも寒さにも 圧力にも宇宙線にも耐える すごいのがいるんだ)

「それから いったい わたしは なにをしてきた ことか」

その瞬間 魔法使いさんの体はとんでもなく縮み、色も透明に

あしは長い尻尾になり、頭にはつんとした2本の触覚

顕微鏡は、かにの幼生のやうな形になりました。

栄養でいっぱいのおレンジの海のなかで浮遊する生き物たちの中で、かつて魔法使いと揶揄された人物だった生物は大きく、のびをしました。

(たまごがさきか にわとりがさきか で、なかった
あらゆるものが じつはたまご だったんだ)

幼生になった顕微鏡も、こりをほぐすかのやうにうねうねして、とってもゲンキです。

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



おなかをすかせたやまいぬさんが、じりじりと絵に歩み寄ってきました。
舌なめずりをしつつ、においの元をさぐっています。

でも やまいぬさん、ン?とくびをかしげました。
おいしげなおいは、もわ~っと辺りに舞うでなく、目の前の平面からでています。

額縁の中には、たくさんのくだものが空中にうかんでいました。

巨大なりんごのまわりに 蔦付きのぶどうが列を成して環をつくり
回転しつつ発光するすいかが通り過ぎてゆきます。
あんずや きいちごや ももだって、満足げにゆったりと みわたすかぎり

はちさんが きらきら宝石みたいなま~るい蜜をかかえていて、
その蜜が 発信する電気のやうに 各くだもののほしへ運ばれていきます。

やまいぬさんはひょこっと前足をかけて額縁に飛び乗り、プラムをぺろっとたべて眠り始めました。

くだものだったべられる でもいっぱい食べちゃいけないよ
かちかちに凍る林で腹を壊したら 牙でも鼻でも目でも爪でも 治せない

そう、ぱっくのオサであるだんなが昔 こいぬっこたちに教えてくれました。

よく遠吠えをした岩ほどもある葡萄の葉がわるつのやうに降って来て、ゆっくり眠れることが
なかった やせた背中に

やまいぬさんはなかまと思いきり駆け回る夢をみながら、寝ぼけて尾をふい、ふいはちみつの球があちこちで、穏やかな熱で照っていました。

そして、絵のかかっている一角は また静かになりました。



青いキャップをかりめろの殻のやうにかぶった子が、絵の前にやってきました。

たくさん描かれた まる を見て、あのとき無くなっちゃったぼーるだ、と小さな声

すっきりしたしろい服のせんしゅが きらきらする光とわいわい応援したり 何か食べたりして
る人々の山の中で ギゅんとなげたり うったり はしたり

うーっとくやしいおかおしたり、きらきらな紙がふったり、ワイワイみんなでお酒かけあったり

帽子さんは みるのは大好きです。

何人にも増えたにいちやんが がんばれがんばれ してるみたいで

でも帽子さん、ほんとうはちょっぴり すごいきおいで飛んでくるのが こわいのです。

やんちゃな親分肌の子が、こんど逃げたら遊ばないっといういました。

その子はただ いじわるなのではなく、解らない所をこうしてみなっ と教えてくれた子でもあります。

親分は、いっぱいゲンキになってほしくて きびしくしているやうです。
でも、帽子さんは、ぼーるを捕ることだけでなく、いろいろなものがこわくなっていました。

冷え切ってぶるぶる震えるココのまえで、額縁の中は夕暮れの空き地を描き出しました。
まわりのおうちには灯りがともり始めていて、カレーのにおいがしています。

カレーに誘われ、かりめろ帽子さんはよっこ、よっこ、よっこらせと3度目でのぼり成功
わんこの遠吠えの聞こえる空き地でみつけたのは、泥だらけのボールでした。

ごめんね、にいちゃん

話しかけると、ボールは生き物のやうにとびまわり、捕れるかな、というふうにときどき帽子さんをかすめます。

つんのめって、ころんで、わっとよけちゃって、またおいかけて行って...

どろんこと兄貴分のぼーるのひみつ特訓は、まだまだ続きさうです。

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



三つ子の白い宇宙人さんが、てくてこ歩いてきました。

ひとりはお耳を渦巻きのやうに丸め、ひとは金平糖を頭の周りの空中にまわらせ、もうひとは目がさーちらいと・ぶらっくほーる両方のやうです。

でもみんな、あすばらのやうな尾があるのは共通です。
3にんとも、新しい宇宙船をさがしているところです。

額縁の中はあくあまりんの海で、つかまれる白い球が無数に浮いています。
みんとの香りが 絵の外にまで漂ってくると、三つ子は思い思いに動き始めました。
宙をかくと、からだは浮いてゆっくり進めます。

浮く球体をだんだんつなげて動物をつくっているのは、渦巻きさん

浮く球体をねそべりながら足の指で回転させているのは、金平糖さん

浮く球体の内部構造をときあかさうとしているのは、光目闇目さん

「立体おえかき出来るトイ」「のびのびひみつ基地」「球体は未知の金属と はんめい」

3にんはそれぞれ、ころからさう思って 改めてあたりを見回しました。

ほんとうのところはどうあれ、それぞれにとっての”発見した真実”はちがうやうです。

ひとの思うことを正しくつかむことができず ずれたり、どれが他より正しいとは限らなかつたり それで頭を抱えたり

さういうときもありますが、絵のなかではたがいのおかおをみて、なんだかココも ふんわか

未知を発見した3にんは、3者3様に にこにこ得意げです。

遠ざかってみると、額縁の中は 一匹の白くて奇妙なうさぎさんが 星をつないで遊んでいるやうに見えました。

ばたん、と どあをどこかで しめる音の エコー

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



雲がひとかたまり、ふおふおとやってきました。

額縁のなかの まる をみて、ふおふおの雲さんは（これは木だ）と思いました。

いつか流れるなかでみたもの
おおとかげが あるところは 満ちていて

幾たびあとか みたら
おやまのうえに どっしりいっぽん のこってた

いつもあらたでさだまれない なか
浮かんでは雨と落ち また浮かんでは雪と落ち いずれ海へつどう そのなか

くるったやうなどしゃぶりにもこおりにもたおれず

しらずに根で小さいものたちをまもり とりやけものをうろにやどし、陽をあびて葉をゆらし
雷で裂けても負けなかった あの木さん

雲はくる〜んとおおきくいどうしながら、ちらちらと淡い五彩になりました。
微笑んでいるのかもしれない。

あのことろ 赤さんにもなっていなかった ひとたちは、
みんなで苗を うえましたよ

あなたといっしょにたっていた森と同じしゅるいの苗を

話しかけつつ、雲さんはすう〜っと鳥瞰の木の 根元へおりていきました。

そして 大樹さんの下でおひるね が、やっとやっと 叶いました。

そして、絵のかかっている一角は また静かになりました。



手紙と羽ペンをもった黒衣装のくろうんさんが、おどけたすてっぷでやってきました。
手やかおの所々に錆があって、跳ねるたんびに小さな種がころんっ

はて、というような動きをして、くろうんさんは大きな絵に注目

○が いっぱい

くろうんさんの ぼんぼん付きの三角ボウシがぐるんぐるんまわり、おどりながら紙に何か書き付けました。しかし、紙にはなにもかいてありません。

ペンの仕掛けに入っていたインキは、もう何十年も前から固まったまま
くろうんさんは てへっとじぶんで頭を軽くたたき そのまま静止してしまいました。

額縁のなかから、すこしずつ 大きく声が聞こえてきました。

声の主は満席の客席のやまじゅうにいて、皆でリズムよくくらうんさんと呼んでいます。

じんたも たからったからっと聞こえてきました。
笑いを誘うやうならっばや せっかちなばいおりんの音も

それでもなかなか動かないくらうんさんにしびれを切らして、ぜんまいじかけのいぬがとっとこ駆けてきました。

いぬはわおん！と呼んでくらうんさんにゲンキなたっくる

くらうんさんはギギギと全身を鳴らしつつ3回転半の着地ですっきり立ち、羽ペンと手紙をくわえ、ぜんまいの仔犬を抱いて絵の舞台の火の環に飛び込みました。

見事にとびきってポーズをきめると、おしりは空中ブランコのうえ
いぬさんはすっと立ち上がり、下の客席に前足をふりました。

客席にいた歯車頭のお客さん達は飛び上がって喜び、自分たちもそこらじゅうで芸をはじめました。

ひふき、そうとうのへび、駆け回る白馬に乗り万国旗をだす角うさぎ 椅子の塔の頂上の剣に片足で立つ女性、怪力さんに踊りこさんに 豪快であやしげなテーマソングを熱唱するトラさん...

特別豪華な見物席では、しんぴ的な目の砂漠の古代王子様が 微笑んで見つめています。

ふしぎの夜にいきた者たちのカーニヴァルは まだまだ続きさうです。

そして、絵のかかる一角はまた 静かになりました。



きょうは絵の前には、なにもきていません。

広く白い部屋も、そこへつながってくる同じ色の、先が闇で全く見えない廊下も、静まり返っています。

しかし、額縁のなかは 変化していました。

水色の布の空を背景に、幾本もの糸でつった綿の雲のへいや
その中を、青い目の白い動物の仔が わふ わふ 歩いています。

しきりにきよろきよろしています。

足の下にいた 似た形をふちどる灰色の仔が、どこかにいってしまったのです。

呼んでも声は しゃぼんだま

でたらめにだらんと伸びてくる金銀のリボンにはびっしりと「えっせ ぱるふえくとうす」

じぶんの部分であるかげの仔とさっきはじめて歩いたばかりだから、駆けてどこかへも まだいけない

仔いきものはくふん、と小さなしゃぼんをだしましたが、また歩き出しました。

”ぼくは そのときだけみえたそのこと いっしょに きた

そのこのなかに ぼくのゆめのかけらがあり ぼくのなかに そのこのきおくのかけらが

だから どのもののなかも どこかいつでも はなれても おわっても

ちがうぼくが ちがうそのこが どこかでそれぞれを はじめる

ここは ひろいねえ

だから あるこう”

いっぽ、いっぽ 踏みしめながら歩きます。

かげの仔は耳が長くて真っ赤な目の、砂漠のいぬさんのような姿でした。

おや、絵のかかる一角のどこかで なにかの影がひょうひょうと 何千年を あるいている



大きな絵の前に、破れ傘さんがやってきました。

わにさんのやうに這いずって 金具もぬのもぼろんぼろん ところどころ撥水された水のたまがくっついたり はなれたり

やっと絵の全体が良く見えるところまできて、もちてを首のやうに伸ばしてみました。

傘さんには、それが長年受け続けてきた雨の粒の静止したものにみえました。

すると、額縁の中は見上げる雲の青灰色のまとまりになり、懐かしい音もまた

持ち主さんは、雨が降ると慌ててバケツや割れたお皿を並べ、小さな部屋で傘を広げていました。

傘さんは天井の穴から滴る雨をうけて みずみずしく潤うやうな心地でした。

というのも、雨こそ活躍の場であり、また雨水が硬いものに落ちたら なんだか痛かろうなと思

っていたからです。

それに、雨をあらわす言葉たちのなんと表情豊かなこと

持ち主さんは大事なことのためにいそいそと借りた服をきて、ちょっと照れ笑いしながら新しい傘で、おでかけ

その日に破れ傘さんは、おやくごめんになりました。

ふうふういいつつ這いずって壁を登り、傘さんは絵の中へとたんにさあーっと降ってきたのは、持ち主さんを思わせるものでした。

辞書の1頁ずつ、まるめがね、新聞のきりぬき、小鳥の切手の手紙、木彫りの象、湯のみのやうになったマグカップ、紫カタツムリの殻、魔法の杖、羽根1本

当たるたびに、傘さんの姿が変わります。

やがて傘さんは、からすの頭と足と翼、黒猫のあとあしと尾をもつ動物に変わりました。

”さてはて やっと旅ときたもんだ

まざあ あったか〜い味噌汁でも つるっといきてえね”

ねこがらすさんになった傘さんは、ぶるぶるっと水を払いつつ やけにひびく鳴き声一つ残し雨霧のけふる山道にきえてゆきました。



壁画のやうな長身のひとが、すこし大きな絵の前にいます。

何処から見ても神秘的な横顔で、瀝青の肌と白金細工の長い髪 目はアルマンダインの重厚な赤

黒犬さんの頭ですが、このひとが持っているのは鞭とアंकでなく、電気ペンと触って画面を動かす板です。

板には、迷路の地図のやうなものが表示されています。

ですがどうも調子が悪いらしく、黒犬さんはそれらを仕舞うためにおなかを出しました。

銀縁のやうなおなかに道具が吸い込まれると、服を戻して腕組み

さて、どこに行ったものか など思っていると、くふんというちいさな はなごえ

額縁のなかは はながしらが熱くなるやうな くうちゅうの夕焼け

大きな水のたまが うねり へこみ ぼよんと跳ね くだってゆきます。

めもあいていず、まだよくあるけないいきもののこ
黒犬さんはゆっくり、長い指で抱き上げます。

”こんどはどうしたね？”

”最近ほんのこどもの頃のことを思い出せなくなってきて、仕事の合間に辿っていたんだ”

対極のものたちは、ぐるりを見渡しました。

もういや、というときにも よかったよう、というときにも、
だしたかろうがだしたかなかろうがながれる 原初の水のほとぼしり

夢幻のふたごのかたわれのことなら、私がおぼえているがね、とは意地でもいわずに、黒犬さん
は仔を絵の外にそっと置きました。

お礼が言いたくて少しふりかえりかけ、意地でもそうせず腕だけしるしに上げて去っていく白犬
あたまのひと

光はへんかと発見と 闇は滞積と謎と
それ以外ももちろんあり、あんちて一ぜもあり、ひろがりもせばまりもまた

ただたまには、汚れでない闇がうっかりした光を自然体でれすきゅーすることが、あるやうです
。

そして静かになった一角の らくるいの園を、黒犬さんは青いカニさんの歌を歌ってぶらぶら歩
いてゆきました。



棒人間さんが ちょちょこ さささっと 絵の前にやってきました。

良く落書きやぱらぱらまんがで描く、あのおなじみさんです。

絵はまるがっぱいの、はじめの状態のまま

棒人間さんはぴきっと3本線つきで鉛筆をかがげ、床にたくさん丸を描き始めました。

すると、えのきのやうにひよろひよろ、ぽん！っと 棒人間ぐんだん誕生っ
みんなでアリさんのやうに、額縁によじ登ります。

おやおや、わらわらのうちひとりが、絵に入れることを発見しました。みんなも、わあーっ
ぼうりんぐのぴんみたいにころげこむと、そこには壁面と同化した 巨大な顔のれりーふ

しかめっつらなのか くるしいのか はたまた力をこめているのか

みんなでン？していた棒人間さんず よっしゃーっとどたばた動き始めました。

あっちでお店屋さん そっちで変身っ ここではまほうつかい むこうでは自主うんどうかい
まんざいに 歌自慢に 棒人間対抗おりょうり対決に 棒人間、宇宙より愛をこめて に...

なんだかいろいろ！や♪や☆マークをだしつつ、繰り広げています。

れりーふさんは、すこうしだけ、顔の力がほぐれたようです。

こころの欠けや割れは、ゆっくりゆっくり いろいろといろいろりんくしつつ じぶんでやっとわ
かりながら 歩を進めていくみち

でも だからこそ そのために 好きなものやあったかなひとや楽しいものが ウレシイのかも？

直接絆創膏にならなくたって、

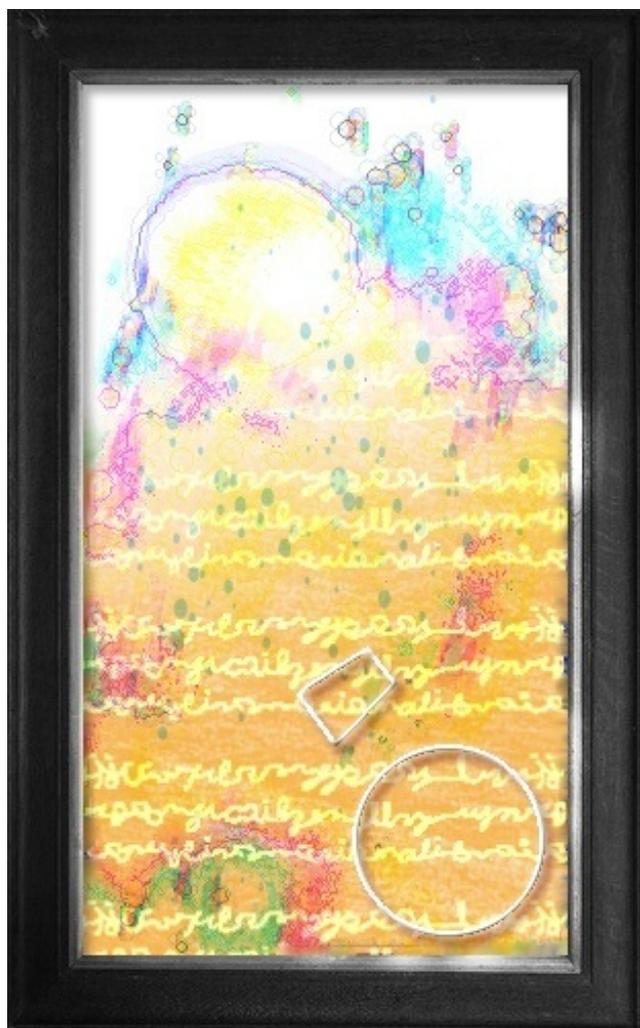
たったひととき きらっとするヴいじょんが みえたら

それがゆっくりゆっくりのおともに なるのかも？

かたちはぜんぜんちがいますが 棒人間さんたち、みんな気持ちの粒の星々のようです。

おやおや、れりーふさんのおひげやまゆげや もみあげみたいにぶらさがるとるよっ

そうして、絵のかかる一角は また静かになりました。



アート仲間が、陽のあたる席で熱心にお話しています。

風車の音と、一休みのわいわいさわぎと、ニワトリさんや郵便馬車の音
こちよいい風も 吹いています。

ひとりは、だって何百年も残るのが素晴らしい絵じゃないか といいました。

すぐ消えてしまっても残る物だってあるだろ と、かえすひと

結局かげきで、じぶんを楽しませてくれる を見る人分できる者だけが拍手の的なのサなんてぼ
やくひとも

お得めにゆーを持ってきた大きなおねえさんは ワタシは落ち着いていて優しいものが好きだわ
もちろんふえいくじゃない、ね とおぼんのおこぼれをモップのやうな野良っこさんへ

豆のスープとばりかたのパンをがつつのお洒落帽子くんたちに、大きなおねえさんにっこり

そういえば、あいつどうしてるかな と一人

人の頭がみな卵に見えると言ったり、
四大元素で絵を描くとしてキャンバスをどろどろにしたり、
空気の中には偽りの煙が充満してしまうとよく水に潜ったり、
部屋中に薄く土を敷いて草花を生やしたり

ちょっとかわった探求者さんです。

心配だから行ってみることにしました。認めたくないけど、皆この人のものが必ず残る気がしていました。

探求者さんのかりていた小屋は、奇妙にねじくれた大木になっていました。
はじめからそこは さうでしかなかったやうに

そしてその木に、おおきな絵がかかっていたのです。



ぼこぼこした黒い甲羅だらけさんが、白いによろによろ足で歩いてきました。
たんぶら一の天然水をたちどまって ときおりごっくん

かたちはにっていますが、ばいなっふるでも ぽてとまっしゃーでもないやうです。

甲羅さんは、あしを埋めるのに最適なところを探してきました。
なかまもふしぎなことに他の大分類と異なり歩くことができ、みんなでラボから脱出しました。

赤とオレンジと灰白におおうずまきの空と 削った木屑のやうな、生きて動きまわる土
どれだけのなかまが、みずみずしいじゃんぐるに 植わったかなっ

とても広いちへいが、白くつるっとしたじめんと垂直にかかっています。
木と醗酵したものの混じったにおいのする巨大四角の中は、南国のびーちの砂 いちめん

イザみずのもりへっ！と、甲羅さんはちよっかくさんかけいの上の辺の軌道で、どごぼっ
砂の壁をもごもぐ もごもぐ

ぞぼっと砂からでると、そこはだれもしらない、みなみのしまでした。

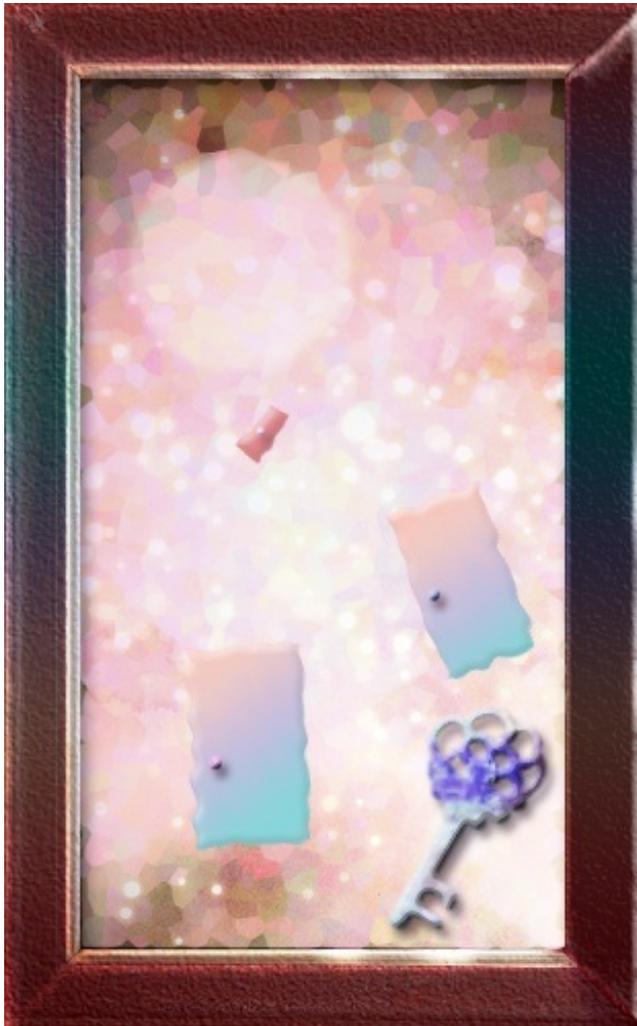
しまは、いたいたいほどあなやきずだらけの、殆どしずんだばとるしっぷのうえにありました。
でも、いまはゆっくりねむっています。

どぼどぼぶくっ しゃわしゃわしゃわ...と 波打ち際
まだまだ若い植物達が おひさまと船をはこんできた海風とたくましく はいたっち
あじさしがきゅっ きゅっと 枝でお天気のおしゃべり

甲羅さんはわくわくがこみあげていて、下にまみずのありがたよいところを探し当てて、やっと
こさじめんに埋まりました。

きりきり きりきり

世界のどこかから、らぼなかまのえこーがっ



かち かち かち と、ちいさな銀の鍵さんが 絵の前にあるいてきました。

鍵さんは息遣いのやうに斜めにくりかえし傾いで、ふと 絵の前に浮き上がりました。
よ〜く考えつつ、思い出しつつ、あちらこちらの部分を見に行きます。

ぶうんと投げ上げられ、大都会の植え込みの缶さんと御馴染みになりました。

するどい眼のぼす猫さんのおなかがふもふも温かいことも、からずさんが悲しみを生き抜いた数
だけ光るものを集めることも、ねずみさんがホントは肝っ玉かあさんであることも知りました。

凍える迷宮にすむ いくせんのものたち

その中で鍵さんは決めました。

ほんとうのとびらを ひらきたいと

額縁の奥の空中に、たくさんの鍵穴があらわれました。
すうっと絵に入っていき、また かし かし 歩きながらがめます。

氷や苔だらけの木肌 錆びた金属 機械や大仕掛けつき などなどの扉たち
中からは 鳴き声や風や水の音

でも、扉のなかからは、鍵さんはかやのそと
だれも鍵さんを知りませんし、鍵さんもわかりません。

きにやむことなく、すすんでいきます。
開かなくたって、数々のふしぎな扉のこれくしょんをみるのはうきうきするやうです。

でも、ずうっとあるきどおしで、ちょっぴりよろっとしてきました。
とたんに 先ほどまで平気だった風が、凍るやうに身にしみてきます。
金属のからだに 冷えは大敵です。

ぷるぷる かきこきしつ 鍵さんはふんばってあるきます。鎚の重みと手の温かさと影の健気
を知っていれば、もうはじまりの粒は持ったもの

凍える風達はその身じしんを氷漬けにしながら、ひゆるひゆるひやらひやら かってきままに過
ぎて行きました。それもあつたまるいみ ふんばりなのかな

いじわる型な風さん達にも、涙と幸？

でも鍵さんはそんなふうにするのを好まないし、それならその涙と幸があるのです。

フェルトを貼った扉が、がちゃ と開きました。

鍵さんに、こころからあつたまる小さな灯りが、まるまると照りました。

絵のなかと外で、あつたかおいしいにおいと 扉を閉める音の えこー

そして、絵のかかる一角はまた 静かになりました。



まっくろのお面をした子が、絵の前にやってきました。

お馴染みの風呂敷を背に広げてたらし、のど元で結んでいます。

やぶけた帳面の切れ端には、なぞのめっせーじ

ひとつ、ふたつ...と、ぼそぼそっ

絵のまるの数をカウントしています。

とうとう幾つ数えたか解らなくなると、じぶんで嘔き出してしまいました。

そのうちに写真はお祭りの飴になり、絵の中はよく通った分校への道が

そのでこぼこ1本道のうえの目の前に、ぴっかぴかの自転車があるのです。

もち手は黒で、ぼでいはめたりっくな青 しかくい前かごやべるまでシャキーンと新しい

だれのもない 自分だけのじてんしゃ

とうちゃんのばいくはまだ乗れないし、かあちゃんの自転車はハンドルがぐいっとなっていてよく
転んじゃう

でもこれはさどるの高さも、ペダルも、あらゆるところがピッタリです。

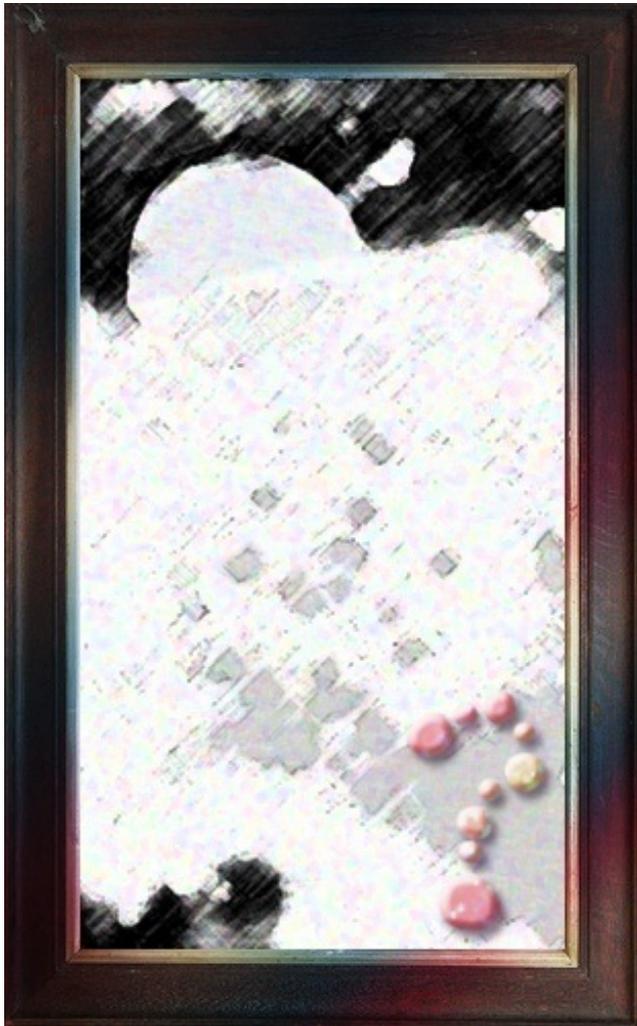
お面の子はよっ、と絵に入り、よろしくっと自己紹介
そしてほいっと飛び乗り、一気にフルスピードにしつつ どこまでも漕いでいきました。

分校の道なら、よなかだって通れらあと だーくひーろーのやうにマントをはためかせ

でも、あの道にあんな辻と石像 あったっけ？

お面の子の未知への旅は 今始まりました。

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



おおきな絵の前に、かっぱらーめんをもっくら食べている人がいます。

しゃつが片方べろんとしていて、ふもふもした耳と尻尾もたれ～んと
おしりのぼけつつからは、歩いてきた道筋どおりに どんぐりや松の実

梅わかめ胡桃牛乳レモン味をもっくらずるずるっとたべつつ、額縁の中を じい～っ

絵のほうも何に変わるか迷っているのか、牛柄のやうな 月の表面のやうな模様がのたり のた
りしています。

食べ終わってひげや口の周りのものを前足で丁寧にお掃除し、改めて大きな目で絵を じい～っ

あたまを ぼりぼり

目の前の絵ほどの巨大なうろと、ぴかぴかのどんぐりの山と、尻尾を抱き枕にして眠る冬じゅう

もよもよ考えながら 何の気なしに絵を押したら、水面のやうに中へ

鼓動のやうな音が遠くから聞こえる、もそもそした黒い草のだいちと、白い草一面の空
それがときおり石のやうな形と質感に変化しつつ、また草に戻る を 繰り返しています。

鼻と髭をふごふごさせながら立ち尽くしている、のんびりりすさん

「なんやねえ」

初めてだらけの中で 大事さうにひとことつぶやくと、のしのしと 歩いていきました。

草をなでてみたり、石におでこをぐりぐりっとしてみたりしつつ
まるで 氷河期のあけた 想像の中の原始のひとのやうに

ひとまず まるまるしたどんぐりが沢山有りげな方へ
それで拾おうと思ったのか、らーめんのカップもしっかり持ったまま

おや、リスさんが落としてきたどんぐり達 一列の小さな大木型になって 絵にはいっていく

そして、絵のかかる一角はまた 静かになりました。



木彫りの像が、不安定さうに浮遊してきました。

うちこわされるかつての豪邸の隠し部屋にいて いっしょにたたきられるとおもった闇の間

きづけば、白い廊下にふわわ〜んと

大きな絵の前まで来て 着陸っ

木のまぶたをみひらき、木の眼でながめます。

まる まる とおおきくちいさく たくさん

像の木の脳裏に、はるか昔の感覚が蘇りました。

根元少し行ったところから いつもふろふろ ふろふろ伝わってきたわずかな重み

像は不器用にぶつかりつつ、やっと額縁の中へはいりました。

もわもわしていた感覚は、どんどんはっきりしてきます。

足先からほそく まっすぐ むすうに登ってくる、森の土の奥からの水
ひんやりは隅々ひろがって行って、背中にさむけがっ

そのとき 森の開けたところに、巨大な花がのぼりました。
茎が無く、暖かさと光をはなつ 真夏の花

すると 像の体中から、あくびをするやうにいくつもの青い芽が出てきました。
芽は体中をおおうやうにぐんぐん出て、ぐんぐん伸びて 伸びて

あっというまに、ふわふわ揺れる 珊瑚と茸とこすもすとの合体のやうな植物群になりました。

ぴんく しろ えんじ あお まだら かしいだすとらいぶ

ついに塗られることのなかった色や模様が、像さんのまわりで踊っています。
まわりにさくけなげな花さんたちとはチョット...いえ だいぶちがうけれど、ワオひとしおっ

木の耳にもりくる 花々のささやき
花々にもりくる あたらしい花のささやき

見えないつうしんと香りとなにかのいおんで、お話しています。

おや 白い廊下のとちゅうで ドアノブが無限機械のやうに かいてんしている

そして絵のかかる一角は、また静かになりました。



黒い輪郭線だけの、人が余裕で入れる大きさの立方体が やってきました。
ゆっくり転がりながら、白い廊下をすりぬけてきて 額縁の前に浮いたまま静止

立方体さんはおなかのなかを部屋にしようと考えていました。

ちいさなテーブルや椅子を置いて、窓らしきものをつけて、植物をおむかえして、ランプも置き、壁には生きて空想する絵を

立方体さんは愉快さうに額縁にかこんかこん、と軽く当たりました。
絵にあいさつとたのみこみを しているやうです。

絵は だまってゆっくり まるをたくさん 平面に浮かばせています。
考えているのか 眠っているのか

立方体さんはおそらや、うみや、いきものなどに なるはずでした。

光のてがみ 光の写真 光の映画にはなったのです
おどろきやこころの波に満ちた 変身の日々でした

でも、中でならんでいた箱は こわれてしまって みんな重さの無い奇妙な絵文字にかわってしまいました。

ひとつだけ変わりかけでほうり出され さまよって 深く深くしずんできて ここへたどり着いたのです。

伝え終えてずいぶんの間があき、立方体さんは絵に吸い込まれていきました。

そして絵の、絵の具と繊維の波間の向こうの みたこともない空間へ

見えたものは 星のやうに輝く色とりどりのものたち
そのひとつひとつの中に なにかいて、なにやらつくっているもよう

そのなかを 消え入りそうに瞬いていた粒が、広くて大きな おだやかな闇のじくうで ふちの丸い立方体の、小さな白い空間になりました。

なみなみとなみうちながら あたらしい白いおへやが のびをしている

おや 絵のまる模様 ふえたかなっ

そして、絵のかかる一角はまた 静かになりました。



首と尾が長く、すらっとした2本足で歩く羽毛恐竜さんがやってきました。

大きな絵を前にして、羽根のついた指をぐーぱーさせつつ なにやら考えています。

○ おおきいものちいさいもの 額縁の中に見えるいちめん

首にかけていた研究用の水色眼鏡をかけて再び眺め続けるうちに、○たちが動いていることに気がつきました。額のむこうから、たえず描かれている いろいろなものにみえてくる まるもよう

ずっと首だけを絵の中に入れてみると、そこに描いているひとはなく、生きて動く細胞で出来た迷宮が広がっていました。

一度首をひっこぬいてから 頭の飾り羽をフワッと開いて思わず両足で2回 飛び跳ねました。竜さんなりの、わっほいのやうです。

ためしに羽根をひろげて忘れ物の確認を済ませ、助走をつけて絵に飛び込みました。

四角くならぶブロックや 巨大なすてんどぐらすは、植物細胞

水を上へととおしてゆく透明な管に、つぶつぶ ごつごつの花粉の装飾

浮遊したり 固まって建造物のようにある 柱型に六花型 さんかくの結晶たちに ミクロの岩
模様の床

おや 同じ大きさのみとこんどりあさんと ふぁーじさんが つみき対決をしている

流れ星があちこちにつたっていく暗闇の洞窟では、長くそこここで繋がった岩たちから 一瞬だ
けの音が

羽毛恐竜さんは、眼鏡でよく見てみようと水色眼鏡をかけました。

よくよ〜く じっくり

でも、断定でける発見や法則をみきわめようとすればする程 あらたな謎がでてきます。

ん〜 むずかしいなあ

しっぽにも並んでついた羽根をゆらり ゆらり させながら、考えるにゆうろん回廊のなか
手足がついた かえるさん一歩手前のいきものが、手を振ってふらい・ばい しとるっ

あのこは なにに なるのかな

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



文字も読めないほどの古い切符が、足跡だけの人にすいんすいん 運ばれてきました。
足跡の所だけ、霜柱としまった雪を踏んだ ぬかるみのやう

弧を描く軌道で持ち上げられ、まじまじと見つめられている切符
持っているのであろう手が 小刻みに震えています。

そして切符は逆の弧で低くおろされ、そのまましばらく
大きな絵を見ているのか、頭のありそうな位置から 白い息が登ります。

絵は、はしるれっしゃの座席と車窓に変わっていました。

がさごそっという音とともに切符がきえ、見えない外套の人はその裾を額縁にひっかけてつ つ
の中へ

こと こと あるいて 外套の人は とすつと席へ

大きなきゃんばすを抱えた人がいて、すみません いえいえ

若い絵描きさんは熱心げに そして奇妙な 絵との対話の熱弁
外套さんは ある富豪の一族の栄枯のおはなしを 穏やかな聞き手をしながら

小熊の頭をした子が うとうと 泡をぷか ぷか うかべつつ
ぴくにつくの祖父さん孫さんが わくわく
ぎゅうっとうでひきよせあう どこかの時代の家族さん ずっといっしょだと 泣いている
異国の新聞を読む あんこうの頭をしたぎゃんぐに
おとなしい子牛をいっしょにすわらせ、なでながら話しかけている民族衣装のひと

なにか気になって みんな窓の外をみました
凍りついたまどの向こうを過ぎ去る 過ぎ去る 灰白の原野

人々のめに映る分だけその中につもっていく 凍える大地 雲の海 ケーキの上 夜の砂漠
その上を、本当はいないといわれた未確認生物のまぼろしが 去っていく

まるで、ふりむいてはいけない約束のやうに なごりおしさうに

ただただ眺めている外套さんとちがい、絵描きさんは釘付けに目が離せないで固まっていた
。

おや、黒い外套さんの背に、何時の間にか かなしげなニビ色の 大鎌が

...がみえれば、さうです、その駅ですな たしか
そこへつくころには また変わるでせう

そういへばあのひも あんな ひも、そらだけは

抜群に まこと 描いたようだが 描けぬほど でありました...

そして、絵のかかる一角は また静かになりました。



顔じゅうに布を巻いた人が、絵の前にやってきました。

布は ても端からほどけていて、人が止まった振動でやわらかく ずり落ちてしまいました。

その人の頭は、まったくそのまま新鮮さうな 卵です。

まるがいっぱい描いてある絵は、何か橙色がかった霧を漂わせ

腕組みをしながら、じっくりそれを いろんな角度から とおくから近くから ながめています

。

卵あたまのなかからは、こつんこつんと つつつく音

額縁の中には、鳥の巣とおそらがみえます。

組み合わせられた小枝が周りを固め、柔らかな草や 落ちていた羽根も一枚ずつ集まって 寒くないやうに

おやどりさん、飛んできました。

ふもふもおなかの白い 足の黒い 他は全部夜空の柄をした鳥がくわえている 幾何学の剣

ぴよ ぴいぴい ぴいよぴいよぴいよっ

頭の卵のひなが、よりゲンキにつんつんしています。ひとは、慌てて頭をおさえてっ

(まだ充分じゃない、もっと手を加えなくては
まだ完成じゃないんだ そう思えない まだ...

まだ、剣は受けとれない)

たまごのなかから ひっしのうったえ

鐘の音が、がらんがらん、ごおんごおんと、めいっぱい響き渡っています。

白かった一角は黒になり、赤になり、紫になり

同時に卵の人は絵のうちがわになり、そとがわになり、だんだんすべてが模様のやうに溶けて

溶け合っていて

いままで絵にすいこまれていった人やどうぶつやものたちが、われた卵の殻の隙間の朝焼けのお
そらへ びゅんびゅん色とりどりに飛び出していきました。

みんな、絵に入る前より 落ち着いたかおをして

そしてぴいよぴいよとなくひなどりを
そのひなどりをうける殻のあたまをしたひとを

描きかけの絵に やさしく眠らせ

幾何学の剣をくわえた鳥がいきおいよく、舞い上がりました。

そして、割れた白いくうかんはそのうち、みな
ちぎれぐもになりました。

おや すやすや眠るひとのところが、額縁の中で新しい 色絵の具のみなもに なっている



らくがきだらけの建物の壁のあいだの、れすとらんの裏
反対側もたてものの裏 あとは高い金網と、曇り空の大通りに続く小路

くそっといいいながら、しましまのねこをなでている ソロっ子
するどい眼も、ねこさんの にゃあ？という顔をみとるうちに 少し和んできます。

でも、ほっぺたはまだ ひりひりと

ここは地球のほかんとこの何十倍も何百倍も重力がかかってら
みんなそれにだんだん 慣れてっちまって
おかしいことも しょうがねえっていうし

あいもかわらず おやまのたいしょうが
あれこれきめて、ばんばんたたきのめす

ちえあるふうにも があつとこわがらせるふうにも

どこにあるってんだろな

”家”ってなあ な～、ねこすけ

ねこすけさんは名前に不満なのか、ふっと起き上がって しなやかに歩き去っていきました。

あ～あと肩をかきこき、のびのび～っとしていると、いつのまにか金網がヘン
ん？と見ると、絵がかかっています。

両腕をめいっぱい広げてやっとなどき、縦は身長より大きな
よくこんなん持ってかれなかったなあ、と じっくりみると

あえて何かの上に乗っ白に塗ったであろう上に一箇所 水色のまる

何に見えるかってえのかな こういうのは それとも意味はなくて、バツとかくんかな

ななめからみたり、近くから・遠くからみたり

なんだか新しい気分が、こころに蔓延した翳りの雲の中で光り始めました。

ほっぺたさんは指で、絵をなぞりました。

水色の上にたいりくと、しまと、きょくちのこおりと
その近くには、おつきさま

ついでに、自分の名前の変わりに「my yard！」なんて走り書きっ

色は、つきません。

朝焼けのやうにちょっと笑って、両ぽけつとに手をin
英語のはなうたといっしょに、ゆうゆうとあるいていきました。

絵が描きたい気分を たずさえて
のしかかる 重力のなか 肩をきって

おや、金網の前に奇妙なひとが

絵の具もかわかない惑星達の動くさまを見て ほほえむかわりに ひながぴいっ

そして、絵と奇妙な人は また別の地へ 消えていきました。

いつかどこかで、またこんどっ...？

うつろい額絵

<http://p.booklog.jp/book/65954>

著者：謡犬 ユネ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuneutainu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65954>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65954>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

(尚、作品の一部に、加工自由・クレジット不要の無料素材を使用しています。)